

関西大学工学部化学工学科（現・環境都市工学部エネルギー・環境工学科）

2010.3.発行

第16回 同 窓 会 報

〒564-8680 吹田市山手町 3-3-35

TEL06-6368-1121 内線 5840

同窓会編集委員会 発行

<<< 巻 頭 言 >>>

「就活に思う」

平成21年度・学科教育主任
環境都市工学部 エネルギー・環境工学科 教授
三宅 義和

大学4年間は就職するための助走路である。これは今も昔も大学の側面であろう。しかしながら大学進学率50%と言われる最近はなんか違う？何でだろう？ここ数年間で国公立を問わず、日本のどの大学でもキャリアセンターや就職支援センターを設置して学生へのサービスを行っている。関大では資格試験、語学力など実学を学ばせるためのエクステンションリードセンターもある充実振りである。入学してきた新入生に対してもう4年後の就職についての情報を提供する。4年生にはインターンシップと称した企業での就職体験までである。

大学に入ってきた目的は何なのかと問いたい？なんか学生たちは、あこがれの大学生になった途端、もう就職で頭を悩ますとは！ただ現実、そんな学生がどれだけいるかは知らないが、なんか学生たちにゆとりがなくて可哀相ではある。キャリアとは何か？工学部の〇〇学科に入学してきたのである。何はともあれ、その学科の核となる学問体系を修得することが土台となるはずである。したがってそのことを第一の目標にすべきである。

大学の初年度に受けた教養教育は、今思えば人生において大して影響を与えているとは思えないが、あの退屈な時間の中で自分自身について考えられた貴重な時間であったような気がする。大学入学初年度は、自分自身を見つめる時期であって欲しい。その為には無駄な時間が必要である。大学二、三年目は、やはりその学科の核となる学問を修得することに全力を傾けるべきである。そして大学四年目で工学教育の最大の特長である卒業研究を行うことで、その学科の学問を適用することを経験して欲しい。卒業研究を履修できるかどうか分からない時期からリクルートスーツに身を包んで就活を始めている現実、企業もこれで良いと考えているのであろうか？企業は学生の潜在能力に期待しているらしいが、

この時期にその個人の能力を的確に判断できるのであろうか？

いっそ大学の入学および卒業は秋にすると良いのかもしれない。そうすれば高校卒業後半年の間に入
学試験を受け、大学時代もゆっくりと学業に励み、秋から大学卒業生として、就活を行い社会人として
の新たなスタートを切れば良いのではないかと考える、最近の就活状況である。

<<< 着任のご挨拶 >>>



「新任のご挨拶」

平成11年博士卒・鈴木研究室
環境都市工学部 エネルギー・環境工学科 助教
中 川 清 晴

化学工学科卒業生の皆様、2009年4月にエネルギー・環境工学科の助教として赴任致しました中
川清晴です。この機会をお借りして、新任のご挨拶をさせていただきます。

私は、1999年3月に本学博士課程後期課程化学工学専攻を修了し、学位取得後、日本学術振興会、
科学技術振興事業団で博士研究員として、早稲田大学、(独)物質・材料研究機構、東洋大学で研究お
よび教育に携わってまいりました。

学生時代は、主に大阪工業技術研究所(現:(独)産業技術総合研究所 関西センター)で「低級炭
化水素の選択酸化反応」に関する新規固体触媒の開発を行い、以降、博士研究員時代の前半は、触媒反
応を中心に研究活動を行っておりました。2002年につくばにある(独)物質・材料研究機構に異動
してからは、ダイヤモンドやカーボンナノチューブをはじめとする「炭素材料合成とその用途開発」に
従事しておりました。学生時代から、身近で未知の分野にチャレンジする多くの研究者たちと接するこ
とができた経験が、研究職に就きたいという気持ちを強くし、新しいことに取り組んで行きたいという
想いを、今日まで持ち続けてこられた源です。

エネルギー転換や環境の問題の改善など、重要性がますます高まっている触媒ですが、触媒反応を研
究していた時は、100年前から夢の触媒反応といわれるメタンからのメタノール合成が、自然界では
いとも簡単?に行われており、自然の力の偉大さ、巧妙さを感じました。また、次世代の新素材と期待
されている炭素材料合成に取り組むようになってからは、特にプラズマCVD法によるダイヤモンド合
成や液層中での新規カーボンナノチューブ合成では、ほんの僅かな不純物や欠陥により期待した機能や
性能が得られないという材料合成の厳しさを経験することができました。これらの経験を教育・研究を

通して、エネルギー・環境工学科で学ぶ学生諸君に伝え、彼らの知的興味や好奇心を刺激できるよう努めてまいりたいと考えております。

10年ぶりに関西大学に戻ってまいりましたが、外に出てはじめて感じた関西大学の良さと、文化の異なる他大学で勉強したことを、内と外の二つの視点から考え、両者の違いやそれぞれの優れている点、改善が必要な点をこれからの教育、研究に生かしていきたいと考えております。

以上簡単ですが新任の挨拶とさせていただきたいと思っております。今後ともよろしく願いいたします。

<<< 卒業生に聞く >>>



「化67年入学の同窓会開催」

昭和46年卒・三箇研究室
(株)日本環境管理センター会社
(元工学部助手)
倉田 陽

昨年11月7日に学籍番号化67年（‘67年入学）の同窓会を友人の川口光次君、西川史朗君と共に世話人となり、一昨年に引き続いて関大100周年記念会館横のレストラン“紫紺”で開催しました。一昨年（’08年）は、化学工学科の創立50周年記念式典が開催され、同年に還暦を迎える・迎えた同級生が多いことから、還暦の祝いを兼ねて記念式典後に開催した。ただ、小生は記念式典直前に交通事故を起こし、式典及び同窓会にも出席出来ず不義理の次第となりました。昨年の同窓会には、1年後輩にはなるが小田教授にもご出席を頂いて大学の現状等のご紹介をいただき、お蔭様で旧友との楽しいひと時を持つことができ、大変感謝しています。会社生活の一線を退いた者が殆どですが、それぞれの道をやり遂げたという思いを感じました。学生時代の風貌が思い出せない旧友も多くいましたが、これを機会にまた新たな友情を育てられればと想っています。これも関大化工で育て頂いた諸先生方のお陰と感謝するばかりです。尚、同窓会は毎年1回11月の最初の土曜日に“紫紺”で開催することになりました。多くの同窓生のご参加を待っています。

昨年末、横川先生の訃報に接しました。長年のご指導に感謝するとともにご冥福をお祈り致します。



「260人の孫と超有名な隣人」

昭和47年卒・三箇研究室
西川 史朗

昨年3月末で長年勤めた会社（日産自動車）を定年退職しました。大学を卒業し会社に入った時には考えも付かない様な長い先のことだと思っていたが、過ぎ去ってみればあつという間の38年間。化学工学を専攻しながら自動車会社、いや「日産」しか頭になかった者にとって、今のような就職氷河期では無かったもののまだまだ創部10年という事で先輩もいない関西の私大卒業予定者には、求人も来ていない関東の会社の入社試験を受けさせてもらうだけでも大変苦労したことが懐かしい。

会社へ入ってみれば同期入社450人のうち一番多いのが早慶と東大、その次が東工大というような状況で、関西大学???。一応みんなと同じように設計・開発を志望したものの自動車屋には珍しい化学屋ということで配属先は生産技術。化学屋だったら塗装と言う単純な発想で塗装技術担当として会社人生をスタートした。光化学スモッグが社会問題になり始めた時期でもあり、自動車屋にとって商品の公害対策と同時に生産工程の公害対策が最大の課題と言われている時期だったので、無公害塗料や塗装設備から発生するHC除去方法について自由に研究させてもらい入社間もない若造にテストプラントで数億円の金を使わせてくれた当時の日産自動車の自由さと勢いが懐かしく思われる。その後新車を何車種か担当、工場作りや海外メーカー（VW, Ford等）との共同生産Proj.や海外出向等を歴任、日産での最後の仕事は三千人の生産技術者を預かる生産技術本部の管理部長。気が付けば同期は殆ど居なくなり役職定年が近づいた時は10人も残っていなかった。

家内も堺出身と言うこともあり定年後は関西で、と言うことで無理を言って関西の子会社に横滑りしたのが6年前。それ以降、来るべきセカンドステージに備え今までには無い長期計画をスタートした。土地探しから始まる終の棲家作り、サンデー毎日に備えた地域デビュー対応として生涯学習講座受講等、着々と計画をこなし昨年4月に晴れて自由の身。

その後のセカンドステージの一端（近況）を紹介します。

一つ目は小学校の理科の授業のお手伝い。ゆとり教育にうつつを抜かしているうちに日本の子供の学力低下は著しく、これはいかんと方針転換。理数系の授業内容を増やしたのは良いが先生のキャパシティを越えてしまい細かいところまで手が回らない。これを助ける為に「理科支援員」と言う制度が発足、それをやらせてもらっています。50年ぶりの小学校。理科の実験の準備や授業時に教室に入り先生と一緒に子供たちと格闘しています。最初はどうか戸惑ったが、慣れてくるに従い可愛い孫が一挙に260人も出来てしまいました。終業式を前に子供たちからお礼状(写真)を貰いついホロ

リ。

もう一つの楽しみ、それは終の棲家として決めた場所から始まります。我が家の窓の向こうはなんと世界最大の古墳「仁徳天皇陵」。我が「隣人」はかの超有名な「仁徳天皇」なのです。それで俄かに歴史に目覚め、図書館に通い歴史書に目を通し、公開講座や各種講演会に日参している内になんと堺観光ボランティア協会のガイドとなってしまいました。堺に来て下さる観光客に仁徳天皇を初め行基・千利休・河口慧海・与謝野晶子等堺ゆかりの人々、古代から中世・近世の堺の歴史の伝道者(とまでは行きませんが)の真似事を始めています。時間を作って堺にお越しになり奥深い「古代のロマンと自由都市堺」を是非満喫して下さい。その折にはお手伝いさせていただきます。



「横川先生の思い出」

昭和 53 年修士卒・西村研究室
(株) 三徳
中 西 二 郎

昨年 12 月、横川親雄先生がお亡くなりになりました。恩師として、また先輩として尊敬している大好きな先生でした。私は横川先生の研究室の卒業生ではありません。隣の研究室である西村山治先生の学生でした。学生時代の思い出という一番に出てくるのが“お酒”の話になってしまいます。当時横川先生と西村先生は“竜虎相搏つ酒豪”と誰もが認めるお二人でした。私たちの学年は宴会好きが集まっていたのか、なぜか 1 年生のときから飲み会があり、その都度学科の先生たちを招待しておりました。その連中が当時の燃料研(横川先生)と抽出研(西村先生)に集まったような気がします。研究室時代はこの 2 研究室合同の飲み会が度々あり、非常に楽しい思い出です。

話は突然最近に飛びますが、2002 年 11 月に久しぶりに横川先生にお会いしました。と言うのも抽出研の卒業生は毎年 11 月 23 日に抽窓会を開催しております。もちろん酒飲み会ですが、この時は「横川先生もご招待しましょう」とのお誘いに喜んで参加してくれました。80 歳になられた先生は昔と全くお変わりの無いのに感心しました。宴もたけなわの頃、横川先生はすっと立ち上がり「君たち！今から試験をする！用意はいいか！」と叫びました。40～50 才のおじさん達にこう言い放った先生を見て「懐かしいな～！」と思ったのは私だけでは無いと思います。それから 5 年間、先生は毎年参加してくれ、その最後の年に先生は「老人性懐古症候群」という随筆を皆に披露してくれました。ワープロできちっと打たれた文章をみて私は「先生すごいですね～！」と褒めたのが弾みで、後日、自宅宛に分厚い封筒に入った「老人性懐古症候群」の束が届きました。その一文を紹介します。

<人生を Double に見ることの勧め>自分の誕生年を現在の年齢だけ溯ってみることである。・・・中

略・・・自分がその間に如何なる状況に晒されたかを歴史が語ってくれる。後略・・・

この文章とともに、横川先生の年表が添付されており、その表には先生の誕生年より 83 年さかのぼると、“天保 10 年 徳川家慶 ゴム加硫法”と記されていました。私も負けずに年表を作っています。まだ“明治 32 年 山縣有朋”までしか出来ておりません。慶応まで行くかな～？



「卒業生からの現況報告」

平成 6 年修士卒・西村研究室
信越化学工業(株)群馬事業所
中山 宏

私は、現在信越化学工業株式会社 群馬事業所に勤務しております。群馬事業所は、当社のシリコーン製造の中心事業所であり、私は入社以来 16 年間、このシリコーン樹脂の製造に携わって参りました。

シリコーン樹脂は、使用される製品の裾野が広く、その形態もモノマー、オリゴマー、ポリマーと多岐に亘り、当社のシリコーン製品は約 4 千種に上ります。これらの製品は、日用雑貨品、化粧品から自動車用途、電子部品用途等広範な分野に使用されています。そうしたことから比較的不況に強い商品と言われてきましたが、一昨年来の経済不況による自動車、電子部品分野の落ち込みの影響は、大きなものがありました。この様な景気の影響を受けない強い体質作りや、業界再編の動き、そして中国内でのシリコーンの大型プラントの稼働の動きに抗して、国内に限らず世界での成長を図る為、一層の競争力のある製造技術の確立を求められる今日この頃です。

この様な状況の中、私は入社以来一貫して製造設備の技術スタッフとして、シリコーンの製造技術全般を担当してきました。振り返ってみれば、処方検討から設備の建設まで、本当に幅広い業務を担当してきました。その中でも、入社して初めて大きな設備増強を担当した時の経験は忘れる事が出来ません。設備設計から工事施工、試運転、現場移管と全てが初めての経験で、設備が稼働する前には見落としは無いかと、不安と緊張感を感じつつ何度も繰り返しチェックしていた事を思い出します。

その後も幾つかのプロセス検討、設備建設に携わりましたが、自分の担当した設備が始めて稼働する時の緊張感と、無事稼働した時の達成感、そしてなにより、苦勞を共にした方々との一体感は、何物にも変え難いものです。今後も、多くの得難い経験が出来る様、前を向いて努力して行きたいと思ひます。

後輩技術者の皆様にも、多くの業務を通じて私が経験した以上の「得難い経験」をして貰いたいと思ひます。久振りに千里の丘に思いをはせつつ、現況の報告とさせていただきます。

《《 学生の窓 》》



「大学生活での貴重な体験」

平成22年修士卒・山本研究室
浜田 裕三

大学2年のときに、ふと海外旅行に行こうと思うと父に話したところ、知り合いの日本人夫婦がイギリスに住んでいるので、行ってみないかと言われました。これまでに会ったことはなかったのですが、3週間ほど滞在させていただくことになりました。出発は8月の初旬を予定していましたが、7月にロンドンで同時爆破テロが発生しました。出発を再検討しましたが、ご夫婦はイングランド北部のリーズという都市に住んでおり、問題ないとの連絡もあったため、変更はしませんでした。

初めての海外で不安はありましたが、無事リーズ・ブラッドフォード国際空港に到着することができました。しかし、ここからが問題で、入国審査でかなり苦勞しました。何とか質問に答えていましたが、大学での専攻を聞かれ、「化学工学専攻」と答えると審査官の表情が一変しました。今までの質問を一からやり直し、家族構成や両親の職業まで聞かれました。しかし、それでも別室に連れて行かれ、荷物検査をすることになりました。この頃、実行犯や事件に関与した生化学を学ぶ大学生などがリーズで逮捕されていたのです。また、この空港の利用客は地元の人が多く、観光客などほとんど来ません。入国審査官にとっては、今来てほしくない人物（化学工学専攻の学生）だったことでしょうか。別室で荷物検査をしながら質問に答えていたところ、入国審査官が電話に呼ばれ、電話を終えてこちらに来ると入国してよいということになりました。ご夫婦が外から電話を入れてくれたのです。ご夫婦によれば、やはり私は危険人物と疑われていたそうです。このときほど誤解を解けるほど英語が上手くない自分を恥ずかしく、また化学工学を専攻していることで損をしたと強く思ったことはありません。

入国までに相当の苦勞をしましたが、ご夫婦の助けを借りて何とかイギリス滞在をスタートさせることができました。滞在先はイギリスの田園風景と市街地を思わせる光景が広がっている素晴らしい場所でした。毎日2-3時間は外に出歩き、風景や街並みを楽しんでいました。それと平行して、ご夫婦はほぼ毎日知り合いのイギリス人の家を訪問しており、私も毎回同行させていただきました。訪問先では「日本と比較してみてもどう思うか」などの何かを対比させたような質問が多く、日本に対する知識が少なく、日本はこういう国だという明確な意見を持っていなかった私はこの手の質問に苦勞しました。的確な答えを用意できず、相手をはっきりさせることもありました。ただ、わからないながらも真剣に相手の目を見て、耳を傾けているとその姿勢については評価していただくことも多かったです。日本についてもっと理解し、英語を話すようになればならないのは当然ですが、人に接する姿勢の大切さ

について改めて考えさせられました。その後はヨークやリヴァプールなど、イギリス各地を観光し、8月の末に無事日本に帰国しました。

長いようであっという間に過ぎた3週間でした。入国審査で苦勞し、恥ずかしい思いをしたことが一番印象に残っていますが、イギリスで素晴らしい体験をできました。この経験を通じて、英語をしっかりと勉強しよう、より幅広い視点で物事を見ようと心がけるようになりました。意識はしていませんでしたが、研究室に入ってからもその時得た教訓を生かして研究をしていたのではないかと勝手ながらに思っています。大学生活でしか得られないかもしれない自由な時間を積極的に使い、充実した学生生活を送ることができて本当に良かったです。

<<< 横川親雄先生を偲んで >>>



関西大学名誉教授横川親雄先生は昨年12月14日ご逝去されました。享年87歳でした。先生は京都市に生を受け、京都帝国大学燃料化学科を昭和19年にご卒業になられ、京都大学大学院特別研究生、講師、助教授を経て昭和44年4月に関西大学工学部化学工学科の教授に着任されました。京都大学の助教授としては3年次生の分析化学実験を担当され、週4日午後1時から5時半までの時間を実験教育に尽くされました。化学天秤の馬乗り分銅を操作して、分銅の補正を来る日も来る日も行い、絶対誤差0.3mg以内で質量の測定が出来るまで厳しく指導されていた姿が脳裏に焼きついています。研究では、一貫して石炭化学の研究に従事され、先生の師舟阪渡氏との共著「石炭化学」はオイルショックの後我が国の石炭研究が復活した時のバイブルとも言うべき名著でした。先生の学問、学生の指導に対する姿勢には、決して筋を曲げない強い意思が感じられ、常に襟を正して接しなければならないような凛とした雰囲気を持えられた方でした。

先生の生年とエネルギー学会の前身の燃料協会の発足の年が1922年であることは、ご自身と石炭

の研究の間に何かの因縁があったかのようなお話を晩年よくされました。

本会では、理事、石炭科学部会長などを歴任され、石炭科学部会の発展に多大のご尽力をされ、これらのご業績に対し、昭和 37 年度と昭和 62 年度の 2 度にわたって燃料協会賞をご受賞になられております。関西大学においては、大学院工学研究科長、関西大学大学院部長の要職を歴任され、大学院の発展に尽力されました。

平成 8 年には勲 3 等瑞宝章が授与されております。

先生は上に記したように大変厳しい一面をもっておられました。お酒をこよなく愛でられ、そのような席では、師と学生との関係なく打ち解けて学生たちと和気藹々のお付き合いをされ、学問のみではなく人生の先人としての学生の育成にも努められました。告別式には、多くの京都大学、関西大学の卒業生が先生を慕ってお別れのため遠路より参列されました。先生のご冥福をお祈りいたします。

関西大学名誉教授
鈴木俊光

“横川親雄先生を偲ぶ会”が催されました

3月13日(土)に先生のご自宅に近い、京都ガーデンパレスにて開催致しました。ご来賓に西村山治、鈴木俊光両名誉教授、ご遺族のお嬢様にもご出席頂きました。

卒業生は関東から九州に至るまで各地から60名ほどが参加、ご来賓より「追悼の言葉」ならびに卒業生からも「先生の思い出」を語って頂きました。その後、懇談会では遺影を前に献杯し、一同和やかに歓談しました。筆者自身、恩師の化学量論(ハウゲン・ワトソン・ラガッツ著)、分析化学および実験や燃料化学などの熱意溢れる強烈な講義を思い出していました。米寿の祝賀会が叶わなかったことを無念に感じますが、卒業生の活躍振りが何よりの供養と思います。改めてご冥福をお祈りいたします。

環境都市工学部 エネルギー・環境工学科 教授
昭和49年修士卒・横川研究室
小田 廣 和

<<< 教室便り >>>

■ 横川親雄名誉教授がご逝去

横川親雄名誉教授が平成21年12月14日（享年87歳）にご逝去されました。心よりご冥福をお祈り申し上げます。

■ 小田廣和教授が環境都市工学部長に選出

小田廣和教授が平成21年10月より環境都市工学部長に選出されました。

■ 田中俊輔助教が化学工学会・研究奨励賞を受賞

田中俊輔助教が「規則性ナノ構造体の合成法の開発とその構造・形態制御に関する研究」により、平成21年度・化学工学会賞（研究奨励賞）を受賞されました。

■ 村山憲弘専任講師が准教授に昇任

村山憲弘専任講師が平成22年4月より准教授に昇任されます。

■ 中島福雄技術員が退職、仁科喬優氏が着任

平成22年3月末で中島福雄技術員がご退職されます。後任として、仁科喬優氏（平成22年修士卒業、鈴木、池永研究室）が4月1日付けで関西大学テクノサポートセンターに着任されます。

■ 応用化学科教室だより（引用）

学部改組後、応用化学科は消滅し、化学・物質工学科として生まれ変わりましたが、平成22年度から、化学・物質工学科の第1期生にあたる250余名の4年次生が研究室に配属されます。研究室数は26です。化学・物質工学科のキャリア担当は6名ですが、その内、中林安雄教授、松本昭教授、坂口聡准教授、古池哲也准教授が、旧応用化学系研究室の大学院生ならびに応用化学コースとバイオ分子コースの学部生の担当を行います。

辰巳正和教授が平成22年3月末日をもってご退職されます。長年に渡り教養化学教室の教育・研究の充実と発展に大変ご尽力いただきました。

〇〇〇 編集後記 〇〇〇

第16回同窓会誌をお届け致します。「巻頭言」を学科教育主任の三宅義和教授にお願い致しました。「着任のご挨拶」では、中川清晴助教にご執筆頂きました。「卒業生に聞く」では、社会でご活躍の4名の皆様（倉田陽氏、西川史朗氏、中西二郎氏、中山宏氏）より近況を知らせて頂きました。「学生の窓」では、学部・修士ともに紫紺賞を受賞した浜田裕三氏よりご寄稿頂きました。「横川親雄先生を偲んで」では、鈴木俊光名誉教授と小田廣和教授より追悼のお言葉を頂戴致しました。ご多忙の折、原稿の執筆にご協力頂いた皆様方に厚く御礼申し上げます。